
よりそう

乃里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よりそう

【Nコード】

N4375E

【作者名】

乃里

【あらすじ】

時は幕末。後、新選組の一番隊隊長となる沖田総司が、まだ宗次郎と云う名の少年の頃。ふとした事で迷子になり、辿り着いたの先が、芝居の町、猿若町。そこで一晚世話になった、子供のいない夫婦との話です。

上（前書き）

沖田宗次郎、土方歳三が出てきますが、新選組とはまったく関係の無い筋書きになっています。ご了承ください。歴史と云うより時代小説です。

とうとう釘を打つ手を止めると、松吉は後ろを振り向き、短い息をついた。

「ぼうず、そろそろ帰^けえんな」

松吉は子供の相手に慣れてはいない。だから大工仲間と交わすような、いつもの乱暴な物言いになりはしまいかと、少しばかり気にしながら声をかけた。

だが少年は、まるで言葉を失くしてしまったかのように、黙って松吉を見上げている。

その、瞬きをしない瞳が、上を向いている分だけ余計に大きく見え、更に面輪の線の細さが其れに輪をかけて、何とも頼りなげな風情に映る。

「家じゃ、おめえの事を、きつと心配しているぜ」

何を云われても応えない少年に、松吉はほとほと困り果て、空に散っていた翳雲を手早く仕舞いながら、町全部を柿色に染めて沈みつつある天道を仰いだ。

江戸、浅草猿若町。

一丁目に中村座、二丁目に市村座、三丁目には守田座が芝居小屋を張り、華やかな絢爛さを詰め込んだこの町が、時の老中水野忠邦により、隅田川の西、浅草寺裏手に造られてから、十年余りの月日が経っていた。

芝居小屋の周囲には、客を目当てとする、料理屋、茶屋、土産物屋が立ち並び、そして賑やかな表通りの裏には、役者を始め、座で働く者たちの住む裏店が、ひしめくように軒を連ねていた。

猿若町への出入り口は、まるで吉原のように、三箇所の木戸に限

られていた。しかしだからこそ人々は、この町が世俗と切り離された夢うつつであるような気がし、独特の高揚感を持って木戸を潜る。そして松吉は、この猿若町で働く大工だった。もう四十になろうとしている松吉が、弟子のひとりも取らず、親方と呼ばれる事も無く、気俤に頼まれ仕事をしているのには訳があった。

物心付く前に既に父親は亡く、女手ひとつで育ててくれた母親も流行病で亡くなると、十二で孤児になった松吉は、家作の大家の世話で、神田明神近くの大工の棟梁吉兵衛に弟子入りをした。

やがて八年の年季奉公も明け、小さな仕事ならば任せて貰えるようにもなり、振り返れば、それが人の一生の内で、一番張りのある時期だったのかもしれない。

そんな時に出会ったのが、今の女房のおゆきであり、それは松吉の一目惚れから始まった。

明神下の茶屋で働いていたおゆきは、松吉よりも二つ下で、その名のとおり白い肌を持ち、少し寂しげだが、形の良い、鈴を張ったような目元に印象の残る娘だった。

だがおゆき目当てで仕事帰りに茶屋に通う内に、松吉は、おゆきがその前の年に相次いで亡くした両親の薬代の為に借金を負い、自由の利かぬ身である事を知った。

松吉が姿を見せれば、おゆきは嬉しそうに笑う。だがそれは他人に分からぬ程度の小さなもので、すぐに仕舞われてしまう。そうしておゆきは又忙しそうに、他の客の注文を取りに立ち振る舞う。しかしそのほんの僅かに見せてくれる笑みを自分ひとりのものにしたくて、松吉は、もう一人立ちしている兄弟子の大工に頼みこみ、親方に内緒の仕事を回して貰った。だがそれは、年季奉公が終わったとは云え、まだお礼奉公が残っている身にとっては、ひどく危険な博打を打っている事と同じだった。もしも親方の吉兵衛に知れたら、

恩を仇で返した松吉は、江戸で大工をしていられなくなる。が、それでも良いと思った。

そうして形振り構わず仕事をし、おゆきの借財を払い終えたその三日後、松吉は吉兵衛に呼ばれ、破門を云い渡された。だが松吉には、何の後悔も無かった。恩のある師を欺いた事よりも、おゆきと云う女を手に入れた事の悦びが、松吉に満足を与えていた。

ひっそりと、音も立てずに小ぬか雨が闇を濡らす夜、形ばかりの旅支度を整えると、若い二人は寄り添うようにして江戸を離れた。

それから十年ばかりして二人が江戸に戻って来た丁度その時、この猿若町の普請が急速に進められており、松吉は当座の仕事としてそれを手伝っていたが、結局そのまま町に居ついてしまった。

芝居で糧を得る役者は、商人以下とその地位を限られ蔑視されていた。だがそう云う者達が集まり暮らす町は、飾り気が無く、流れ者の大工である松吉の肌にも馴染んだ。それに芝居小屋の小さな修繕やら何やらで案外に仕事は多く、笑えば、重ねた年を目じりの皺に優しく残すようになったおゆきも、幕間に賑わう近くの茶屋を手伝うようになっていて、夫婦の暮らしは貧しいながらも落ち着きを見せていた。

そんな松吉を困惑させているのが、今日の前にいる、少年とも云えぬ年端の子供だった。

「ここあ、いつまでも子供の遊んでいる処じゃねえ。暗くなりゃ、化けもんが喰いに来るぞ」

少しばかり怖い顔になり脅すように云った途端、少年の身がびくりと強張り、深い色の瞳が潤んだのが分かった。

「そら、見てみる、おめえだってそんなになっちまうのは嫌だろう

「？だったらさつさと帰えんな」

腰を折り、両手を膝にあて、そうして少年の目線に自分の其れを合わせて、松吉は小さな面輪を覗き込んだ。

頼まれた家の裏戸を直しながら、後ろに誰かがいると気がついたのは、半刻ばかり前の事だった。それでもその時は、振り向こうとは思わなかった。何故かと云えば、背に負う天道が、その者の影を足元近くにまで伸ばしていたが、それは本当に小さなもので、咄嗟に松吉は、さつきまで近くで聞こえていたわらべ唄の声の一人だろうと思つたからだつた。

だがすぐに居なくなると思つていた影は、いつまで経つても其処にあり、じつと動かぬ様子に、流石に異な事と思ひ振り向いた松吉を見上げていたのが、この少年だつた。

身に着けているものは上等とは云いがたかつたが、小ざつぱりとした藍地の木綿が、少年の、蒼を透けさせたような白い肌を浮き立たせている。袴や、結った髪から、何処か侍の家の子供だろうとは分かつたが、それにしても、他人の自分ですら先を案じてしまうような、頼りない身体つきだつた。

だが少年は瞬きもせず、まっすぐに松吉を見つめている。

「おめえ、口が利けねえのか？」

もしやと思つた懸念をぶつけてみれば、初めて、か細い首が横に振られた。

「じゃあ、だんまりはよしな」

曲げていた腰を伸ばし、胸元で腕を組み、少し声を叱るようになると、振られたばかりの首が、今度は萎れたように頂垂れた。

そのまま、目を合わせることに無い睨めっこは暫し続いたが、先に根を上げたのは松吉の方だつた。

「ぼつず、おめえ帰える処がねえのか？」

幾分声を和らげたものの、それにも応えず、ただただ頂垂れたままの少年に、松吉は諦めともつかぬ深い息をついた。

「それでお前さん、助左の旦那は何て云いなさったの？」

菜を洗う手を休めず、猫の額ほどの土間から、おゆきは顔だけを松吉に向けた。

「一応、宗次郎と云う名前と、九つと云う年だけは控えなすって、今日はこんな時分になっちまったから、明日他の町に、行方知れずの届けが出ているどうか、調べてみると云う事だった」

「そう、親御さんも心配しているだろうに・・・」
辺りはすっかり宵闇につつまれている。

手元を照らす蠟燭の火が揺らめいて、三畳が一間ほどの小さな部屋の隅に、行儀良く座っている少年を見るおゆきの頬に、痛ましげな翳を落とした。

結局の処、あれから松吉は少年の手を取ると、この町を任せられている岡っ引きの助左のもとへ連れて行った。もうこの時には迷子だとの見当はついていたが、それには助左も同じ意見で、大方、芝居を観に来た親とはぐれたのだろうと、のんびりした所作で、行方知らずの届出が出ているか帳面をめぐった。だがようやくと少年から聞き出した、宗次郎と云う名と年を照らし合わせてみて行ったが、それに該当するような届けは無く、明日町の外の番所に行ってみると云う事で、話は落ち着いた。

そんな訳で、乗りかかった舟から下りることも出来ず、松吉は再び少年の手を引き、猿若町の東はずれにある、この裏店へと連れ帰ったのだった。

「さあさ、大したものもありはしないけれど、たんとお上がり」
炊けたばかりの麦飯と、菜っ葉の汁と香の物。それにもう一品の焼いた魚は、突然、見ず知らずの少年の手を引いて帰って来た亭主から事情を聞いたおゆきが、慌てて買いに走ったものだった。だが少年は、なかなか箸をつけようとはしない。

「どうした？腹でも痛てえのか？」

行灯の明かりが行き届かず、覗き込むようにして問う松吉に、俯いた面輪が小さく振られた。そして細い手指が魚の乗った皿を持ち上げると、それは松吉へ差し出された。

その途端、松吉が破顔した。

「それはおめえが食べばいいんだよ、俺あ魚は苦手なんだ」

三つの膳に、魚の皿があるのはひとつしかない。

箸を持つとしない少年の憂いは、其処にあつたのだろう。だが松吉の声にも、少年は頑なに首を振る。そうして今度はおゆきの方を見て、同じように皿を差し出した。

「あら、あたしもいいのよ、それは・・・ええつと、宗次郎ちゃんだったかしら？あんたが食べる為に焼いたんだから」

笑って言い訳したふたつの目が、柔らかく細められたが、それでも宗次郎と呼ばれた少年は手にした皿を膳に戻そうとはしない。

「それじゃ、みつつに分けたらどうかしら？ねえ、お前さん？」

小さな気遣いを無碍にするにはあまりにも切ないと思つたのか、おゆきの声が、困りきつた風情で少年を見ている良人へと向けられた。

「俺あ、かまわねえが・・・」

が、それに応えた途端、一瞬ふわりと心が浮いたような、それでいてくすぐられるような、奇妙な思いが松吉の胸を覆い、その戸惑いに、先を繋げる声が小さくなった。

「三人で食べたなら、きつと美味しいわ」

その松吉の心裡など知る由も無く、そろそろあかぎれが出来始めた

おゆきの指が、器用に魚の身と骨を別け始めた。

身体つきからも凡そ見当はついたが、少年は元々の食が細い質らしく、腕によそった一膳の麦飯を、松吉が呆れるほど時をかけて食べ終わった。だがその間にも、おゆきは、やれ汁は熱くないか、魚の身に骨は混ざっていないかと、それを楽しむかのように世話をやいていた。そしてそんなおゆきを見ながら松吉は、時折覚える、不意に胸の一番奥を捻られるような、痛さとも切なさともつかぬ、得も云えぬ感覚を、又感じていた。

自分達の間、子は恵まれなかった。だがその事を、松吉は別段寂しいとも思わず通ってきた。だが最近になって、ではおゆきはどうなのだろうと思うことが尠ある。

おゆきは欲を云わない女房だった。それは自分の為に、親方に破門され、積み上げてきた修行時代を棒に振り、大工としての鑑札すら貰えず、一生を歪めてしまったと思ひ込んでいる引け目の所為だと松吉は思っている。子を授からなかったのは、どちらが悪いのでも無い。けれど欲を云わないおゆきが、唯一望んでいるものが自分との子であるのなら、それをどうしてやる事も出来ない辛さに、松吉は女房のいじらしさを哀れに思う。

今も、代わりの汁はもういいのかと、目線を同じにして問うている姿は、いつもよりも生き生きとしているように、松吉には思える。

そんな二人の姿からから目を逸らせるようにして、松吉は、脇に寄せてあった煙草盆を引き寄せた。

「それじゃあ、明日はお店の隅に置いて貰うように頼んで、目を離さないようにするから大丈夫よ。こんなに大人しいんだもの、邪魔

になどなりはしないわ。それに丁度明日は、半日で仕舞いにさせて貰う事になっていたのよ。・・・そうだ」

半纏の綻びを縫い終え、始末した糸を噛み切ると、おゆきは松吉に向き直った。

「ねえ、店を終えたら、宗次郎ちゃんと一緒に、浅草寺まで足を伸ばしてみようかしら。手を合わせたら、親御さんも早くに見つかるかもしれないし・・・」

「だが助左の旦那から何か云って来た時に、おめえが行方知れずじや、旦那が困るだろう」

「あらだつて、すぐそこじゃない。半刻もしないで帰って来るわ」
思いつきは、話している内には決まりごとになってしまったようで、おゆきは渋い顔をした松吉に膝を詰めるようにして、良いいらえをねだった。

「手を合わせりや、とんとんとんと、上手く事が運ぶとも思えねえが・・・まあ、しないよりはましかもしれないねえな。行ってきな」

珍しいおゆきの強引さだったが、先ほど、ふと心の片隅を過ぎった思いが重なり合い、松吉はしぶしぶの体を装って頷いた。それに、心底嬉しそうな笑みが返った。

「ぼつず、明日は大人しく店番をしているんだぞ。その後には、浅草寺に連れて行ってくれるそうだ。浅草寺には、行った事があるか？」

夕餉を終え、又室の隅に行儀良く座っている小さな影に目を向けると、少年は微かに首を振った。

助左の所で、それこそ聞き取れない程の声で、名と年を告げたり、少年の口は一度も開かれてはいない。だが今にも壊れてしまいそうに硬いばかりだった面持ちが、ここに来てから少しずつ強張りを解いて行くのが分かり、それが松吉の心を浮き立たせる。

「そうかい、それじゃ、人に紛れて、また迷子になるんじゃないやねえぜ」
小さく頷いた途端、少年の瞳が、ふと輝いたと思つたのは錯覚だつ

たのかもしれない。

だがそれでも良かった。不安ばかりにいた稚い心は、少しだけ闇を出掛かっているのかもしれない。その事に、松吉は満足していた。

「あたしの布団と一緒に寝かせるから、お前さんはひとりで寝て」膝の上に抱くようにし、少年の身を支えている松吉に向けて掛かった声が、囁くように小さい。

「真ん中に入れて、川の字になって寝りゃいいだろう」
が、室の隅に畳んであった夜具を敷いているおゆきに返った声も、腕にある少年の眠りを覚まさぬよう、輪をかけて低いものだった。

ささやかな夕餉のあと、ひとしきり浅草寺の話で和やかな時を費えていたが、ふと松吉が気付いた時には、少年は、細い身を前後ろに揺らし、もう小さな舟をこぎ始めていた。

思えば、仕事も仕舞いにしようかと思つた夕間暮れ、ひよんな事から持った関わりと、それからの成り行きに、此方も右往左往の連続だったが、それ以上に稚い心は怯え震えていた筈だった。それが小さな安堵の中に置かれた途端、張り詰めていたものが一気に緩んだのだらう。

そうして見れば、精一杯不安を堪えるかのように、大きく見開かれていた瞳を閉じた面輪は、今細い明かりの中で、危ういほど儂げに思える。息をも殺すようにして交わされる夫婦の遣り取りは、せめてその安寧を守ってやりたいとの、ささやかな願いだった。

芝居小屋は天道の陽を上から取り入れ、それで舞台を見せるように造られているから、芝居は日の出と共に始まり、日の入りと共に

仕舞われる。そして猿若町は、それに合わせて全てが動く。朝が早ければ、その分、闇が町の灯を包み込むのも早い。だから松吉もおゆきも布団に入るのは早かったが、それにしても、こんなに早くと云う事は無い。まだ暮れ六つである。いつもならば、夕餉を終えてから暫しの時を、松吉は翌日の仕事に使う道具の手入をし、おゆきは頼まれものの縫い物をして過ごす。だが今日はその時を一足飛びにして、早布団に籠もろうと云う訳だから、長い夜になりそうだと、松吉は声にせず、喉仏だけを動かして苦く笑った。それでも其れが、厭わしいとは思わなかった。

「隙間が、出来ちゃいねえか？」

「大丈夫」

ほとんど目だけで頷いたおゆきの口元が笑っていた。

一枚の布団がおゆきと少年を包み、そしてその上から松吉の布団が覆うようにして被さる。薄いながらも二枚の布団のぬくもりの中で、少年の眠りは深そうだった。

「こんなに可愛い子が行方知れずじゃ、親御さん、今頃眠れないでいるんでしょうねえ・・・」

少年の寝顔を見詰めながら、小さく呟いた声が、顔も知らない相手の心を思い憂いに沈んだ。

「・・・迷子なら、案じるのはちげえねえが・・・」

だが松吉は、先程からふと胸を騒がせ始めていた思いを口にした。その松吉を、おゆきが怪訝そうに見遣った。

「・・・もし、もしもの話だが・・・」

そして更に先を云う松吉の物言いが、躊躇いを映して、どこかぎこちない。

「捨て子・・・だったらと、思えてな」

「お前さんっ・・・」

「静かにしろいつ、ぼつづが目を覚ましちまう」

横臥していた身を、思わず起こしかけたおゆきを、低い声が叱った。その声に呼応して、おゆきも慌てて自分の口を塞いだ。少年の眠りに変わりの無い事を見届けると、ゆっくりと其れを離れた。そうして暫し、闇に浮かぶ白い寝顔を見詰めていたが、やがて静かにその視線を松吉に向けた。

「・・・ねえ、お前さん。・・・もしも、そのもしもが、本当だったら・・・」

不意に語りだしたおゆきを、松吉は黙って見ていたが、言葉は途中で途切れ、そのままいつまでたっても先は紡がれようとはしない。

「本当だったら、何でい」

今度は此方から問うても、おゆきは口を噤んだまま、少年から目を動かさない。

「おゆきっ・・・」

「しい、目が覚めてしまうと云ったのは、お前さんよ」

とうとう堪え性が切れて、少しだけ声を大きくした松吉を諷める声が笑っていた。

「おめえが先にっ・・・」

「あらっ・・・」

焦れて待たされた不満を口にしようとしたその寸座、それを制するかのように、おゆきの声が小さく上がった。今度は何かと、松吉も目を凝らせて見れば、いつの間にか少年の身が横に向き、細い指がおゆきの夜着を握っていた。

「あたしの事を、おっかさんだと思っているのかしら・・・」

「まだ乳が恋しいんだろっよ」

話が途中で終わっている事など、何処かへ置き忘れてしまったかのように、松吉の声にも笑いが籠もる。

「明日浅草寺へ行ったら、飴でも買ってやんな」

握っている小さな手の、その上からそつと自分の手を重ね、目を細めて、亭主に向かい、おゆきも嬉しそうに頷いた。

芝居小屋が並ぶその外れには、裏店が幾つも続く。それは役者の家だったり、芝居で使う小道具や大道具を作る者の家だったりするが、狭い路地からは、三味線やら笛の音色が絶えず聞こえてくる。

その中で、松吉の金槌の音は異質ではあったが、決してそれら粹な音色を邪魔するものではなかった。時折、あなたの金槌を遣う音は節回しがあるようだね、などと三味線の師匠にからかわれるが、それは松吉の腕を褒めての事であった。が、今日はその音を早々に切り上げると、松吉は、道具箱に金槌やかんなを仕舞った。

まだ天道は一番高い処を回ったばかりだったが、さっきまで幕間の一服に出ていた客達も又小屋に戻り、そろそろ秋も行きかけの相を見せている陽だまりが、辺りの景色を静かに包んでいた。

今から帰れば、おゆきと宗次郎も、そろそろ浅草寺から帰って来るだろう。そんな事を思いながら肩に担ぐ道具箱は、いつもよりも軽かった。

お上の御触れによって、ひと処へ閉じ込められたと云う経緯を持つだけに、猿若町は元々が狭い町である。しかも此処で暮らす人々は、すべからず芝居と結びつきがあるから、大概の顔は互い馴染みになっていた。

その中であって、町の治安を預かる岡っ引きの助左は、もう四十も半ばを過ぎていたが、すばしこい身ごなしで、掏りのひとりふたりお縄にするなど茶飯事の腕で、住人達からも頼りにされていた。が、その助左の姿を、裏店へ入る木戸の前で認めた途端、松吉の顔に硬さが走った。

そして更に助左の後ろに立つ長身の男に目を遣ると、自分自身にも分からぬ緊張に、身の内に力が籠もるのが分かった。

「おう松吉、丁度いいところに帰って来てくれた」

だが助左はそんな松吉の様子など頓着無いように、普段は強面だが、笑うと妙な愛嬌が浮かぶ顔を向けた。

「こっちの兄さんが、昨日の迷子のぼうずを捜して、牛込柳町から来なさったんだ」

助左のしゃがれた声を聞きながら、自分の一番真ん中で、必死に固めていた何か壊れて行くのを、松吉は感じていた。

それは言葉にして伝えられるものでは無かったが、もしかしたら、自分とおゆきと、そして少年との三人で過ごした、たった一夜を守ろうとする皆だったのかもしれない。

こんな偶さかな安らぎが、ずっと続く筈など無いと笑い飛ばしながら、けれど心の隅に芽生えた淡雪のような希のぞみに、いつの間にか自分は縋っていたのかもしれない。

松吉の目が、その幸いを摘み取ろうとする理不尽を怒るかのよう
に、少年を連れに来たと云う男を見上げた。

「あんた、ぼうずを捜して来たと言いなさったが、本当にぼうずの身内かどうか、その証拠はあるんですかい？」

「松吉っ、何を出し抜けに云いやがる。尋ね人の届出は、こちらさんの方がずっと早かったんだ」

九つの少年が、牛込柳町から、縁もゆかりも無いこの猿若町まで、まさか来ようとは誰しもが思わず、知らせが遅くなったのだと、助左は長身の男を庇った。そして男は睨みつけるようにしている松吉に頭うぶを垂れると、低い声で、宗次郎が世話をかけたと言ひた。

それは常日頃、様々な役者を見慣れている松吉の目から見ても、姿の良い若者だった。むしろ飛びぬけて端整な顔貌は、人によつては冷たいと云う印象を覚える程だろう。それが今、血走った目をし、まるで掴みかからんばかりにして、松吉を見下ろしている。そしてこの男を、此処まで追い詰めているその理由が、宗次郎を案じる余り故だとは分かる。それでもどうしても、素直に宗次郎を渡したく無いと駄々を捏ねる自分に、松吉は負けていた。

「そつちの兄さんがどつから来ようが、あの子は俺が拾ったんだつ、もう俺の子だつ。誰にも文句云われる筋合いはねえやつ」

「松吉つ、てめえ、何莫迦な事を云い始めたんだ」

「莫迦で上等でえつ、どうしても連れて行くつてんなら、俺を殺してからにしゃがれつ、さあ殺せつ」

わめき散らす声は、家の中にいた者達を表へと引つ張り出し、それが騒ぎになりそうな気配に、助左が慌てて剥いた目を回し、野次馬達に睨みを効かせた。

が、その寸座。

「宗次郎つ」

それまで一步も譲らぬ鋭い目で松吉を見据えていた男が、振り絞るかのような大音声を発した。

そしてその途端、おゆきに手を引かれ、木戸に差し掛かった宗次郎が立ち竦み、次の瞬間、繋がれていた手から滑り抜けるようにして、駆け寄る男に向かって走り出した。

「……莫迦野郎がつ……」

飛び込んできた小さな身体の上から、覆いかぶさるようにして抱き、男の唇から零れ落ちたのは、視界を霞ませるものを必死で堪える唸り声だった。

そしてその腕の中で宗次郎は、始め声を忍ぶようにして、瞳から透いたものを溢れさせていたが、しかしそれは瞬く間に、激しい泣き

声に変わった。時折、しゃくり上げる間が狭まり息が痞えると、男は薄い背に廻した手を上下に擦って安堵させてやる。そうして又宗次郎は、男の腕の中で新たな涙を零し始める。

尽きないそれは、今の今まで稚い心が堪えて来た、寂しさと不安が堰を切ったものなのだ、そして必死で封してきた宗次郎のその心を、あの男はいとも簡単に解きほどこいてしまった・・・
ぼんやりと見る松吉の胸に、悔しさと、そして羨望が重なり合う。
が、ふと気付いてその先に目を遣れば、二人を見詰めているおゆきの姿があった。そしておゆきも松吉の視線に感ずいたか、遠くから小さく笑った。

だがその笑い顔が、ひどく寂しげなものに思えたのは、おゆきの心に、自分の心を重ね合わせてしまった所為なのかもしれないと、松吉は、天に顔を上げ二度三度瞬きすると、まだ大きく震えている小さな背に目を戻した。

つい今しがたまで聞こえていた三味線の音が止んで、自分の叩く金槌の音だけになると、それが何だかひどく煩いもののような気がして、松吉は手を止めた。と、その時を見計らったかのように、今軒の修繕を頼まれている家の隣の戸が開き、そこから細面の品の良い顔が覗いた。

「申し訳ござんせん、稽古の邪魔をしちまって・・・」
「そんな事は、構やしないよ」

無造作に羽織った半纏の両袖を鳶にしながら笑った顔は、もう五十に近いと云うのに、艶のある肌が、下手をすれば松吉と同じ位に見える。元は女形として鳴らしたこの富弥は、芸の肥やしに三味線を習う内、すっかりそちらに興が移り、惜しむ声も聞かずあっさり舞台を捨てると、三味線弾きとして裏方に回り、若い者に教えたりもしている。今では富弥の弾く三味線の音色聞きたさに、小屋を訪れる鼻顧客もいる程だった。

「それよりも、松吉さん、あんだどつか具合が悪いんじゃないのかと思ってね」

「とんでもありません、莫迦は風邪のひとつも引かねえと云いますが、まったくもってそのとおりで」

「ならいいんだけどね。いやね、今日の金槌の音が、妙にちぐはぐだと思ってさ」

「ちぐはぐ・・・、ですかい？」

言葉の意味が分からず、松吉は首をかしげた。

「そう、ちぐはぐって云うのか、何ていうのか分からないんだけどさ、いつもは私が三味線を弾いて、外で松吉さんが金槌を叩いていても、ひとつ空気のように、何の不自然もないんだよ。でもたまに私の具合が悪かったり、あんたの具合が悪かったり、そのどちらかに何かがあると、音が勝手に先走って喧嘩しちまうんだよ」

「へえ・・・、そんなもんですかい？」

「あんだ、気がつかなかったのかい？」

「ちつとも」

呆れたように笑う富弥に、松吉は恐縮し、頭をかいた。

「腕がどうこうと云うんじゃないんだろうけれど、ただいつの間にか、長い付き合いの間に、お互いの音が寄り添うようになったと、まあ、そんな処じゃないのかね」

「よりそう・・・？」

呟いた松吉に、富弥が笑って頷いた。

昨日あたりから、ぐつと厳しくなつた朝晩の冷え込みは、まるで天道までが、顔を隠すのを急いでいるように思える。

そして日が沈めば、空に取り残された雲は、茜の残り陽を下に映し、白から薄ねずへと色を変える。

自分の先に行く長い影法師に目を落としながら、松吉は、先程富弥が云つていた言葉が、胸の裡から去らない。

昨日助左と現れたあの若い男が、どんなに宗次郎を捜し回つていたのか、それは一目見ただけで知れた。そして宗次郎も又、あの男が来るのを待つていた。だがその事に、自分は激しく抗つた。出来る訳が無いと承知しつつ、宗次郎を渡すまいと必死になつた。何故だと云われても言葉に詰まるが、ひとつだけ、その時松吉の頭にあつたのは、前の晩、三人で同じ温もりの中にくるまつて交わした、おゆきとの会話だつた。

もしや宗次郎が捨て子ではないのかと云つた自分に、おゆきは何かを云いかけて止めた。だがその言葉の先を、自分は知つている。おゆきは、もしも宗次郎が捨て子ならば、自分たちの子にして育てたいと、そう願つたのだ。そして宗次郎がああ男の腕の中に飛び込んだ時、おゆきはそのささやかな希を、のぞみひっそりと胸に仕舞いこんだ。

若い時には、見えない心に焦れた事もあつた。それでも一緒に時を刻み生きて行く間には、少しずつ互いの心も見えてくる。が、見えてくれば、今度は、其れをどうにもしてやれない自分に苛立つ。

「寄り添う・・・か」

ぼつんと漏れた眩きが、闇を混ぜ、紅に変わりつつある晩秋の暮れ色に、紛れるようにして消えた。

「帰えつたぜ」

少しばかり隙が出来ていたのを訝しげに思いながら戸を引くと、框に腰掛けていたおゆきが慌てて振り向いた。

「何でい、ぼんやりしていやがつて」

「御免なさい、遅かつたのね」

笑いながら立ち上がった時には、もうおゆきの素振りに不審はなかった。が、その脇にあった包みに、目ざとく松吉の視線が行くと、おゆきが慌てて白い紙のそれを持ち上げた。

「宗次郎ちゃんがね、昨日連れに来た若い人・・・土方さんと云うのだけれど、その人と、宗次郎ちゃんのお師匠さんと、それから其処の若い先生と四人で、挨拶に来てくれたのよ」

「ぼうずが？」

「宗次郎ちゃん、今年の春、牛込柳町の剣術道場の内弟子に入ったばかりだったのよ」

「剣術の道場？あのぼうずがかつ？」

「そんなに吃驚すること、無いじゃないの」

思わず声がひっくりかえった松吉に、おゆきが笑った。

「それで迷子になった日は、その道場へ預けられて初めて、大先生のお使いで、文を届けに九段へ出掛けたそうなの。それが途中でその文を落としてしまって、探し廻っているうちに、こんな処にまで来てしまったらしいの」

「そんなに大事な文なら、何で九つのぼうずになんぞ、託^{たく}たりしたんだ」

牛込柳町からこの猿若町までは、子供の足をして、決して近いとは云い難い。松吉の乱暴な物言いは、その間、不安に押し潰されそうになりながら、探し回っていたのである。宗次郎への不憫を、周りの大人達へ向け怒ったものだった。

「中身は大したものじゃなかったのよ。お師匠さんが、お仲間さんに、暮を打ちに来ないかと誘ったものだったの。でも宗次郎ちゃんにはそんな事は分からないから、張り切って出かけたは良いけれど、それを落として、途方にくれてしまつたらしいの」

「なら、ぼうずも、端っからそう云や良かつたんだ」

「きつと、云えなかつたのよ」

「何故？」

おゆきの声がふと沈んだ事に、松吉の顔が怪訝に歪んだ。

「ひと言、・・・ひと言でも声を出した途端に涙が止まらなくなつてしまひそうで、あの子はずつと堪えていたのよ。失くしてしまつた文が見つからなくて、もう自分の帰る処は無いと、きつとそう思ひこんでしまつたのよ・・・」

まるで其処にまだ宗次郎がいるようにして語りかけるおゆきを見ながら、松吉の脳裏にも、初めて会つた時、自分を見上げていた深い色の瞳が蘇る。

それは大きく零れ落ちてしまひそうに見開かれ、瞬きひとつしなかつた。だがあの時宗次郎は、今にも叫び泣き出しそうな不安を、そうして堪えていたのだらう。

「頑固もんの、ぼうずが」

不意に、鼻の奥をつんとさせたものを慌てて誤魔化すと、松吉はもう一度、おゆきが大事そうに抱えている包みに目を遣つた。

「宗次郎ちゃんがね、持ってきてくれたのよ、お饅頭。若い先生がお好きだそうなの。途中で重いから代わると云つても、此処に来る

まで、ずっと自分の手から離さなかったのだった。・・・夕飯の前だけれど、お前さんもひとつ頂く？」

「お前は？」

「お前さんには悪かったのだけれど、あたしはお茶を淹れた時に、宗次郎ちゃんやお客さんと一緒に、お先にひとつ」

そうと聞いた途端、松吉の顔が顰められた。

「俺あ、甘えもんは苦手だ」

自分ばかりが少年の笑い顔を見られなかったと云う寂しさが、松吉を頑なにさせる。

「宗次郎ちゃん、本当はお前さんと一緒に食べたかったのよ。・・・いないと分かって、とても寂しそうだったのよ」

だがくすりと笑ったおゆきの声に、心の裡を見透かされたようで、松吉は黙ったまま手拭で足を拭くと、乱暴に畳の上へ転がった。

その、丁度目線の先には、饅頭の包みがある。それを敢えて見ないのが、自分でも呆れる頑固だった。

「ねえ、お前さん」

竈の上で菜を刻み始めた包丁の音が、齒切れ良い。それを心地よく聞きながら、つい眠りかけていたらしい。おゆきの声に、うたかたの夢から覚めたように、松吉は煤だらけの天井から土間へと視線を向けた。

「宗次郎ちゃんがね、お正月に遊びに来るって云うのよ」

返事が返らぬとも、おゆきは気にならないようで、後ろを向けたまま続ける。

「若い先生が連れて来てくれるって・・・。そうしたら又浅草寺にお参りに行くって約束したの。あの若い先生は真面目で良さそうなお人だったから、きつと約束を守ってくれるわ」

手を休ませず嬉しそうに語る背が、ふと小さくなったと思ったのは、ささやかな約束を弾んだ声音で教えるおゆきを、哀れに思った所為なのかと・・・

松吉は、振り返らぬ後ろ姿を、ぼんやりと見詰めた。

見えぬ心が見えるようになれば、どうにもしてやれぬもどかしさに、苛立つ事もあると思っただのは、つい先程の事だった。

だがその辛さ切なさの分、相手への慈しみも、いとおしさも増す。其れは、おゆきも同じ事なのだろうか。

そう思っただ途端、松吉の一番深い処に、温ぬくい何かが寄り添った。そしてそれはおゆきだと、確かに心が教えた。

「・・・正月に」

殊更ぶつきら棒な物言いは、胸の奥を熱くするものを隠す為だった。

「ぼつづが来るんじゃ、独楽でも拵えといてやるか」

その途端、振り向いたおゆきが、満面に笑みを湛えた。

だがそれは、松吉が哀しくなる程、柔らかかできないな笑みだった。

今度こそ塩辛いものが目から落ちてきそうぞ、松吉は、ふて寝を装いおゆきに背を向けた。

下（後書き）

お読みくださって、本当にありがとうございました。

これは自分のHP・時代屋の、「新撰組・猿若町界限」のコンテンツに展示してあるものです。

HPでは、時代物（主に新撰組・土方×沖田）のボーイズラブ小説を扱っておりますので、嫌悪感をもたれる方の閲覧は、何卒ご遠慮下さい。

<http://homepage2.nifty.com/momozukann/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375e/>

よりそう

2011年1月29日14時15分発行